

文学部教員によるエッセイ

私の選択

「私の選択？」

加藤 隆宏（インド哲学仏教学）

人とは違う道

長屋 尚典（言語学）

気がついたときには、もう選択は終わっていた

藤井 光（現代文芸論）

「私の選択？」

堀江 宗正（死生学応用倫理）

このコーナーでは毎年、文学部の先生方をお願いして、今専門にしている学問との思い出などを語っていただいています。『PROSPECTUS』のバックナンバーでは、また別の先生方のエッセイを読むことができます。文学部ホームページにも掲載されていますので、興味のある人は <https://www.lu-tokyo.ac.jp/teacher/essay.html> を参照してください。参考までに、最近5年間に掲載されたエッセイを下に記しておきます。タイトルだけみても、文学部の先生方の学問との出会い方、つきあい方が実に多種多様であることが感じられるのではないのでしょうか。

2023年	西村 明 (宗教学宗教史学)	圧倒的な現実のコトバを与える
	根岸 洋 (考古学)	考古学を選んだこと
	佐藤 至子 (国文学)	読めば読むほど
	土肥 秀行 (南欧語南欧文学)	日伊間の博士号ダブルディグリーの仕組みを創設する
2022年	菊地 達也 (イスラム学)	せっかくだし
	井島 正博 (国語学)	認識の仕組みを求めて
	小林 真理 (文化資源学)	自分の直感を信じる。
	芳賀 京子 (次世代人文学開発センター)	女の一生と人生の岐路
2021年	納富 信留 (哲学)	不東一日本を出るという決断一
	梶原三恵子 (インド語インド文学)	学生時代のいくつかの選択の記
	塚本 昌則 (フランス語フランス文学)	フランス語を学ぶことで新たな自分と出会う
	出口 剛司 (社会学)	敵前を、大事なものを抱えてきわどくすり抜けていくやり方
2020年	陳 捷 (中国思想文化学)	私の選択
	三枝 暁子 (日本史学)	与えられた道を生きる
	齋藤 希史 (中国語中国文学)	断片
	福井 玲 (韓国朝鮮文化)	韓国語史研究にたどりつくまで
2019年	三浦 俊彦 (美学芸術学)	可能世界、美的観点、人間原理……
	大宮勘一郎 (ドイツ語ドイツ文学)	隙間から隙間へ
	村本由紀子 (社会心理学)	始まりとしての「選択」
	熊木 俊朗 (北海文化研究常呂実習施設)	遅れてきた臆病者の懺悔

「私の選択？」

加藤 隆宏（インド哲学仏教学）

私たちは何かを選択する時、完全に自由に自分の意志や努力でそれを選び取ることができているのでしょうか。自分の経験に照らして考えてみると、どうもそういうわけではない気がします。私たちが選択できるものには限りがあって、初めから選びたくても選べないものもたくさんあります。古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』には、すべては「運命」によって決められているという極端な見解が紹介されます。「いかなる人間でも運命に逆らうことはできない。運命のみが目的を達する。人間の努力は無益である。」『マハーバーラタ』V.40.30（上村勝彦訳、ちくま学芸文庫）確かに、私たちのあずかり知らないところで、私たちが好むと好まざるにかかわらず、様々なことが決定づけられていることを私たちはよく知っています。私たちは生まれてくる場所を選ぶことができませんし、生まれること自体、私たちがコントロールできることではありません。老い、病、そして死など（仏教ではこれを生老病死の「四苦」とよびます）についても、私たちの選択に関係なく、避けがたく身にふりかかってきます。私たちは日々、自分たちがコントロールできない何か（神の計画、宇宙の法則、『マハーバーラタ』流に言えば「運命」、あるいは、インド的には私たちが過去になした自らの行為の結果、すなわち「業」等々）によって選択そのものを制限されていると言えます。

しかし、このような見方を突き詰めていくと、上でみたような、「人間の努力は無益である」といった、少し困った結論が見えてきてしまいます。修行や善行の実践を通じて幸福に向かおうとする古代インドの人々にとって、努力が無意味であるという帰結は特に受け入れがたいものがあります。そこで彼らはこう考えました。過去（インドの場合には前世も含む）になした様々な行為の結果として発現している私自身を含む現在を変えることはできないとしても、現在に働きかけることで未来（インドの場合には来

世も含む)については変えることができるのだと。これは厳密に考えると、一貫性を欠いた議論となり、矛盾をはらんでいますが、ある種の視点の転換(インド式現実主義的ゲシュタルトスイッチと勝手に名付けたいと思います)が起こっているということなのでしょう。私たちの力が及ばない部分については仕方なく受け入れるとしても、これから起こることに対しては私たちの関与が可能であるというように、未来志向に視点を切り替えることで、私たちの努力や意志の価値が守られました。

前置きはこれくらいにして、私の選択について。

もともと言語に興味があったため、駒場ではいくつかの外国語だけは割と熱心に勉強しました。古典語も一つくらいと選択したのがサンスクリット語でした。これはしかし、ギリシャ語、ラテン語は他の科目と重なっており、履修可能だったのがサンスクリット語だけでしたので、自ら積極的に選択したものと呼べるようなものではありません。それ以外のところでは、ろくに勉強もせず遊んで暮らしていましたので、そうした不真面目がたたたり、留年こそ免れたものの、進振ではごく限られた、いわゆる底割れしている学科しか選択肢がありませんでした。ただ、サンスクリット語を学んでおり、多少面白さを感じていた頃でもあったため、印哲を進学先に選ぶことができました。振り返ってみると、この選択は私の人生でかなり重大なものだったということになりますが、当時はもちろんそれほど重たく捉えていませんでした。「ちょっと面白そうだから、印哲に進学してみるか、他に選択肢もほとんどないし」くらいの感じです。その後、修士に進み、博士に進み、海外留学を経験し、その他の紆余曲折を経て、30年以上経った現在ではインド哲学の教員をしています。その間、ここでは書き尽くせないほどの選択を経てきました。そもそも選べないものについて、諦めることも多くありましたが、自分が選んだわけでも望んだわけでもないのに、思いがけない幸運によって突然道が開けたり、苦境から救われることも何度か経験しました。私が主体的に選択したか否かにかかわらず、自分自身が最終的に決めたことについて、それを選ぶことを許してもらえようような環境にあったことや選んだ道に進むことを応援してくれる人々が周りにいたことはありがたいことで、自分が決めたことに常に全力で取り組むことができたのは本当にラッキーでした。

インドで仕事をしていると「ジュガール」という言葉をよく耳にします。これは、色々なものが不足していたとしてもひとまず現状を受け入れ、創意工夫（急場しのぎの間に合わせとも言う）によってその現状を打開しようというインド流の仕事術、仕事観です。足りないことを嘆くよりも、今あるもので何とかする。途中色々あってもノープロブレム、最終的に丸く収まっていればそれでオッケー、イノベーションが起これば儲けもの。この精神は、人生における選択の話にも通じるところがあると思います。人生には自分の思うようにいかないことはたくさんあります。しかし、選ばなかったものや選ばなかったものを嘆くより、選んだもの、あるいは、選ばざるを得なかったものに全力で取り組んでいく。こういうマインドセットをもっていれば、後になってから過去の自分の選択について振り返った時にも、きっとポジティブにそれを受け入れることができるのではないかと、最近では思うようになりました。

みなさんがどんな選択をされたとしても、ジュガールの精神があれば大丈夫です。迷わずに進んでください。

人とは違う道

長屋 尚典（言語学）

人と違うことがしたい。

私は言語学研究室でフィリピンやインドネシアで話されるオーストロネシア語族の言語を研究しているが、なぜ私が今の専門分野を選択したかと聞かれば、結局のところその一言に尽きる。

子どものころから人と同じことをするのが大嫌いで、スーパー戦隊シリーズなら赤色よりも青色のキャラクター、『コロコロ』よりも『ボンボン』、VHSよりもベータ、『ごっつ』よりも『元気が出るテレビ』、スーフファミよりもメガドライブにかっこよさを感じる子どもだった（学生のみなさんはわからないと思うので Wikipedia で調べてください）。そのような性格だったので、得をするよりも損をすることの方が多かったが、それでも、人と同じように生きて死んでいくのはなんとなく嫌だった。

そんなひねくれ者の私が子どものときから興味があったのが言語だった。私は岡山県の限界集落で生まれ、中学に入るまで一人で信号を渡ったことがないような田舎で育ったが、小学校のときから習い事でやっていた英語の勉強は好きだった。自分が知らない言葉のルールが存在し、そのルールを勉強すればそれを話す人々とコミュニケーションできるという事実がなんとなく愉快だったのかもしれない。

言語に関する興味がいよいよ強くなったのは、中学生のころ、哲学だか現代思想だかの本を読んでソシュールのことを知ってからだ。言語記号の恣意性とか *emic/etic* とかいう言語学の基本的な概念や、レヴィ＝ストロースの文化人類学や言語相対論などの考え方に触れて、もっとこのような勉強をしたいと思った。自分の話す日本語とは異なる構造や発想を持った言語を学び、それについて理解したいと思った。

高校に入ったころには、ふだん授業で勉強している言語の文法に特に関心があって、英語や古文、漢文について勉強するのが趣味だった。わからないところがあれば先生に聞いたり、図書館で調べてみたり、本の記述に

納得がいかなければ自分で文法規則を考えて本の記述を修正してみたり、今から考えると言語学者のまねごとのようなことに没頭していた。

何がそんなに楽しかったのかというと、文法が美しかったからである。英語のテンス・アスペクトの体系を表（パラダイム）にして悦に入ったり、英語で補文節をとる動詞を意味ごとにグループにわけてみたり、そういう作業が楽しかった。一方で、表に欠けているところがあると落ち着かなかったり、係り結びのように何のために存在するのかわからない文法現象を習ったときなどは不安で夜も眠れなかつたりした。

幸いにして、岡山の片田舎の本屋でも受験参考書はある程度揃っていて、英語なら『ロイヤル英文法』や『英文法解説』などの文法書を、古文なら『古文研究法』などの参考書を買って愛読していた。週末には岡山市の丸善や紀伊国屋などの大きな本屋に行って、気の向くままに本を買って読んだ。その頃読んだ本としては、池上嘉彦先生の『記号論への招待』や木村英樹先生の『中国語はじめの一步』などが特に思い出深い（大学に入ってからこの先生方の講義を受けることになるとは想像もしていなかった）。

そんな高校生だったので、東大に入学するころには言語学を研究したいと思うようになっていた。その気持ちは駒場の時にさらに強くなった。当時の駒場には言語学の授業がたくさんあったからである。なかでも、後に私の指導教員となる西村義樹先生の授業は衝撃的だった。授業の冒頭、ソフトな声で、やや恥じらいながら「みなさん、『トイレを流す』というとき、『トイレ』は何を指していますか？『トイレに行く』というときの『トイレ』と同じですか？」という問いかけをなさり、「トイレ」という単語の意味構造を熱心に教えてくださった。「トイレ」のような日常の単語にもこんな多義性があるのかと感動した。

こういうわけだから、進学振り分けでも言語学を勉強できるところを選択しようとするに決めた。しかし、問題があった。今もそうだが当時の東大にも言語学を研究できる進学先がいくつもあったのである。選択をしなければならぬ。そんななかで私は言語学研究室を選んだのだが、それはなぜか？

それはやはり人と違うことがしたかったからである。みんながやっている言語をみんながやっている方法でやるのは、天の邪鬼の自分には耐えられないことだった。みんながやっていない言語を、みんながやっていない方法でやりたいのである。そうすると、できるだけ人がやっていない「変

わった」言語を研究できるところがいい。さらに、相変わらず英語は好きだったので英語を使って研究もしたいし、いつか世界のどこかに留学したい。

この二つの条件を同時に満たしていると思ったのは言語学研究室だった。今もそうであるが、言語学研究室は、日本語や英語だけでなく世界のどんな言語の研究もできる。また、世界のどんな小さな個別言語にも対応する必要があるからこそ普遍的な方法論を志向し、それゆえに、授業テキスト・資料も英語を使うことが多い。まさに自分のためにあるような研究室だった。

実際、その選択は正しかった。当時の言語学研究室にはモンゴルやらグルジア（当時の呼び名）やらエチオピアやら韓国やら台湾やら中国やらペルーやら、世界のあちこちの「変わった」言語を研究している先輩たちがいた。飲み会では、フィールドワークの話をしたり、摩訶不思議な文法現象についてニコニコ語り合ったりしていた。授業では分厚い英語の教科書を渡され、課題も英語で提出するなど、英語も勉強できた。そのときはできたフランス語でソシュールの *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes* を読む演習に参加し、ゴート語の辞書を引いてこなかったという理由で叱られたこともあった。

そうこうしているうちに3年生も終わりに近づき、卒論について考えなくてはならない時期になった。私は卒論でフィリピンの言語、特にタガログ語を研究することに決めた。その理由は何か？

それはやはり人と違うことがしたかったからである。タガログ語はそんな自分にうってつけの言語だった。なにしろ動詞が文の最初に出現するのである。日本語の反対である。日本語なら「花奈がパンを食べた」というところ、*Kumain ng tinapay si Hannah* というように、「食べた を パンが 花奈」という。とても変わっている。しかも、当時の言語学研究室だけでなく、日本でも研究者があまりいなかった。他にも理由はあるのだが、人と違うことができるというのが一番の理由で私はタガログ語の研究を始めた。そして、その研究を続けて現在に至る。

このように、私の選択は人と違うことがしたいという気持ちに突き動かされてきた。それがよかったかどうかは正直よくわからない。よかったこともあれば、わるかったこともある。でも、後悔はない。勉強したいことを勉強し、昨日知らなかったことを今日知ることができる。それはとても

幸せなことだ。

駒場の学生のみなさんには、一回きりの人生だから、他人のことなんか気にせずに、自分の勉強したいことを選択してほしいと思う。もしも私のように「変わった」言語が勉強したいなら言語学研究室に来るといいと思う。そのときは、歓迎する。

気がついたときには、もう選択は終わっていた

藤井 光（現代文芸論）

2008年の夏の数日、僕はアメリカのアイダホ州北部の山間地に滞在していた。そのとき翻訳していた小説の作者デニス・ジョンソンが、そこに居を構えていて、自宅を誰にでも開放する期間に招いてくれたのだ。

地元で詩を専門とする出版社を経営している女性、大学の創作科でジョンソンの授業を取っていた若手作家たち、文芸誌の編集者の男性、ジョンソンの姪たち。そうしたカラフルな面々が、山麓の一軒家に集い、思い思いに数日間を過ごしていた。文芸誌の編集者はかつて原稿料の支払いをジョンソンに断られてしまい、そのかわりに山小屋をひとつ建てる約束をして、毎年この時期に遊びに来て小屋作りに勤しんでいた。

ジョンソンの教え子のひとりが、新婚カップルとして来ていた。イリノイから車で一週間ほどかけてアイダホに来ていて、そのあとオレゴンに向かうのだという。ジョンソンは初対面だったほうの人に、「きみも作家なの？」と訊ねた。そうです、という答えを聞いて、ジョンソンはひと言だけつぶやいた。「じゃあ、ふたりとも呪われているわけだな」

みんなが笑った。その言葉はジョンソンなりの、ベテラン作家から若手への冗談めかしたエールだった。それから9年後、ジョンソンは世を去った。

今になって「選択」というテーマで文章を書くにあたって、その「呪われてる」という言葉は、どうしても僕の脳裏に蘇ってくる。作家であること、何かを書くことが、選択ではなく呪いのようにして引き受けざるをえないものだとしたら、僕にとって、その作家が書いたものを研究すること、翻訳することはどういう意味を持つのか。小説に応答するように論文を書いたり、訳文を作るという形で

言葉を書いていくとき、僕はどこまでその言葉を「選択」したと言えるのだろうか。

2010年、そのとき翻訳していた小説『紙の民』の作者であるサルバドル・プラセンシアに会うために、ロサンゼルスを訪れた。僕より4歳くらい年上のプラセンシアは、小説に出てくるロサンゼルス近郊の町エルモンテのあちこちを案内してくれた。車を運転しつつ、プラセンシアは生き立ちを少しばかり話してくれた。8歳でメキシコからアメリカに移住した彼は、家族も親戚もブルーカラーの労働者ばかりという環境で育った。そのなかで、プラセンシアは作家になりたいとはなかなか言い出せず、まわりには教師になるつもりだと語っていたという。

『紙の民』の原書 *The People of Paper* は、2005年に出版された。その5年後に僕が会いに行ったとき、プラセンシアは第二長編を完成させるべく奮闘している最中だった。本人いわく、ページが綴じられた本ではなく、トランプカードのセットのように、箱のなかに一枚一枚ばらばらのページが入れてあって、読者がどうシャッフルしても読める物語にしたいのだという。「あと一年で完成すると思う」とプラセンシアが誇らしげに言っていたその小説は、僕がこの原稿を書いている2024年春の時点で、まだ日の目を見ていない。20年かけて一冊の本を書くことになるとは、作家本人も予測していなかっただろうし、果たして完成するのかもわからないが、それでも断言できることがある。その本を書くか書かないか、という選択肢は、プラセンシアにはなかったのだ。そして、その「呪い」を引き受けて日々頭を絞っている作家本人は、実に楽しそうだった。

2014年にシカゴに行ったのは、レベッカ・マカーイに会うためだった。そのときはマカーイの短編集『戦時の音楽』を翻訳していたのだった。せっかくなので、シカゴで一番好きな場所はどこですか、と聞いてみると、ダウンタウンの古風なビルに連れていってくれた。芸術家たちのための空間として1885年に造られたその建物

には、僕が訪ねていったときも、音楽教室やギャラリーが多数入居していた。建物のなかを歩き回るのが、マカーイにとっては何よりも心安らぐ時間なのだという。その建物の玄関の上には、“All passes-art alone endures.”という言葉が刻まれていた。「すべては過ぎ去る一芸術のみが時を超える」。

マカーイはハンガリー生まれの父親を持つ作家である。祖父は第二次世界大戦中のハンガリーで、反ユダヤ主義的な法律を成立させた政治家だった。そのくだりを、マカーイ自身が短編の題材にしている。孫娘は祖父の過去について多くを知らないまま成人し、やがては戦争を背景として、罪悪感を主題とする短編を多く書くようになる。自分の創作はどこまで自分で選択したものなのか。それとも、祖父が代表する暗い歴史の力に動かされて小説を書いているのか。その問いは小説となり、芸術に変えられることで、作家という個人のもとを離れて、未来の読者に拡散していく。

僕が初めて翻訳した小説は、ジョンソンの『煙の樹』というベトナム戦争の物語だった。プラセンシアの『紙の民』は、移民たちが土星を相手に戦争を始めるという奇妙な小説だった。マカーイの『戦時の音楽』では、第二次世界大戦の記憶を21世紀にどう保持すべきか、という問題があちこちに顔を出す。つまり、どれも戦争小説なのだ。その三人に限らず、ダニエル・アラルコンの『ロスト・シティ・レディオ』はペルーの内戦、テア・オブレヒトの『タイガーズ・ワイフ』は旧ユーゴスラビア内戦をモデルとした寓話的な小説だし、アンソニー・ドーアの『すべての見えない光』は第二次世界大戦中のヨーロッパ、ハサン・ブラーシムの『死体展覧会』はイラク戦争後の混沌を舞台としている。僕の翻訳との付き合いは、戦争文学と切っても切り離せない。

なぜ戦争文学にこだわってしまうのか。学部4年生のとき、大学院に入るという選択肢をなんとなく考え始めた2001年の夏に、アメリカの同時多発テロ事件が発生して、そこからアメリカがふたたび戦争に突入していったことに衝撃を受けたせいかもしれない。でもおそらく、そうした自覚的な選択よりも大きな要素がある。父方

の祖父の戦争体験である。

祖父は軍人だった。情報機関の所属だったそうだが、祖父本人は自分の体験について詳しいことはまったく語らないまま、戦後 45 年ほどして世を去った。ただ、中国やインドネシアに派遣されていたこと、背中にいくつも傷があったこと、夜中に悪夢にうなされていたことなどは、家族も知っている。でも、多くは空白のまま残されている。そして言うまでもなく、その空白には無数の死者たちがいる。

もちろん、その空白は今では埋まることはない。でも、現在から過去に向けて応答しようと試みることはできる。そしてどういうわけか、現代のアメリカ文学や英語圏文学、とくに戦争の物語を研究したり翻訳したりすることが、僕なりに応答するやり方だった。

そのことを、最初から自覚していたわけではない。この分野の勉強をするようになって 10 年ほど経ってようやく気がついた。目の前にある興味を追いかけて、現代のアメリカで生きる作家たちの言葉に向き合っていたら、それは僕自身と過去とのつながりを新しい形で作り直すことでもあったのだ。何十年もかけて研究と翻訳を続けていく、それは僕にとっては選択する以前のことだった。気がついたときには、もう選択は終わっていた、とも言えるかもしれない。

今、デニス・ジョンソンにその話をすることができたなら、「きみも呪われてるな」と彼は言ってくれるだろうか。

「私の選択？」

堀江 宗正（死生学応用倫理）

このエッセイのテーマは「私の選択」なのだが、それは本当に「私の選択」なのか。人文社会系研究科の教員なら、誰もがそう疑問に思うだろう。仮に、そのような疑問はおくびにも出さないようなエッセイを書いていたとしても、どこかにそのような疑問を隠し持っている。そう信じたいところがある。

このエッセイを読む人には、ぜひ私の **UTOKYO VOICES** という教員紹介インタビューも併せて読んでいただきたい。「人々の話（ストーリー）の中から現代人の死生観や倫理観が浮かび上がる」というタイトルの記事だが、自分の研究姿勢や研究内容をコンパクトに的確にまとめている（インタビュアーに感謝）。

<https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/features/voices006.html>

その中で、人生の出発点として、「自分はどのように生まれてきたんだろう」という問いがあったと語っている。4歳の頃の話である。それからしばらく後に降りてきたのは「人間の幸福のために生きろ」というメッセージだった。当該記事ではインタビュアーが相手なので控えめな語りになっているが、これは、ある種の神秘体験であり、啓示を受け取ったと言ってよい瞬間だった。

記事で語っていないことがある。それは自分が、いわゆる新宗教の信仰を持つ家庭に生まれ、最近よく使われるようになった「宗教2世」に似た環境で育ってきたということである。上記の体験には、そのような背景があるだろう。教祖もやはり「人間の幸福のために生きろ」に近い教えを説いていたからである。しかし、そこにはどこか自分自身の幸福のために、というニュアンスがあったと記憶している。それに対して、自分一人の幸福のために生きるのは、あまりにも小さい、という反抗心が芽生えた。自分と他者の幸福を包摂するような幸福をあくまでも目指してゆこうというのが、そのメッセージの意味を深く考えて出していった結論である。

私は、その教団の指導者たちが、自身の持つカリスマ性を自覚すると分派してゆくという歴史を、後に学んだ。また実際の指導者たちの言葉や態度から、プライドや自尊心が彼らの「選択」を狂わせているのだと洞察した。そして、呪術的な力よりも、無我や愛などと言った教えを備えた宗教の方がより進んでいるのではないかと考えた。ある物事が、より大きな視点から見て、またより長期的な視点から見て妥当なのかどうかを反省するという営みを、長く続けている宗教は、システムチックに組み込んでいる。そのような反省的行為を通して、何らかの徳性を養おうとしている。そうして人格をみがいている人が多くいるため、組織は長続きする。それでいて、自己の限界を自覚するところに、より大きな存在、時間を超えた存在への認識が開けてくる。このような循環が理想的だと思い描くようになった。

高校時代には、こうした反省的な営みを学問的に遂行しているのは、心理学、中でも精神分析だと考えるようになった。大学に入るとエーリッヒ・フロムの思想に触れ、ますます心理学への憧れを強めた。かくして、文学部時代には心理学研究室に所属したのだが、当然と言えば当然だが、自分が探究しているのは、もっと宗教に近いけれど、宗教ではない何か（今日的にはスピリチュアリティ）だと思いうようになってゆく。それは勉学から距離を置くことにつながった。同時に、幼い頃から所属していた教団からも離れ、既成宗教と新宗教に関する書物をあさるように読んでいった。

これらとは別に音楽活動に精を出したこともあり、学問からはどんどん遠ざかり、授業にも出席しなくなった。結果として、あともう少しというところで、単位を落とし、留年に至る。あるレコード会社への就職が内定していたが、それも白紙となる。

こうして、いわゆる何ものからも宙ぶらりんになり、ついでに付き合いっていた彼女からも振られ（後に結婚するが）、自分の存在の意味が分からなくなり、いわゆる鬱の状態になり、それを打破しようと、色々なものに飛びつき、最終的に自分は何かを勉強し続けるしかないと思うようになる。

ある日、図書館が終わるまで本を読み、外に出ると真っ暗な闇の中に安田講堂が浮かび上がっていた。誰もいない大学に自分だけがいて、世間からどんなに取り残されても、自分には何かを学ぶということができる。それだけでいいじゃないか。最後までここで学問を続けてゆく。ふつふつと、そのような思いがわき上がってきた。これも一種の神秘体験、回心体験だっ

たと思う。

人生とは不思議なものである。この挫折と「根拠のない立ち上がり」があったから、私は現在この大学の教授として教鞭を執っていられるのだ。厳しい裁定を下して、留年に導いてくれ、決して学生に妥協することのなかった心理学の高野陽太郎先生には感謝するばかりである。

捨てる神があれば拾う神もある、と言うべきだろうか。自分を拾ってくれたのは宗教学の島藺進先生だった。もちろん、島藺先生は拾ったつもりはなかったかもしれない。勝手に「危ない奴」が付いてきたという感じだっただろう。私はといえば、先生は新宗教の研究者なのだから、「この人ならきっと自分のすべてを理解してくれるに違いない」という思い込みで付いて行ったのだと思う。それもある種の教祖崇拝に近いものだった可能性はある。後に自分が宗教的な権威主義から徐々に離脱すると、先生との関係は、より人間的なものへと変容していったのだが。

回心の前までは、大学の授業というものはサボるものであり、テストやレポートは、人のノートで対策するものだという不真面目な学生だった。そこには小中高を通して教師というものに怠ってきた不信感がある。だが、大学院進学後は、一変した。授業はすべて出席するものであり、不真面目な学生を見たくないで最前列に座り、出席したからには必ず教師に質問をすることに決めた。その時に発見したのは、意外にも自分が他の院生より英語をよく読め、文章を書くのが早いということであった。そして、よく分からないテクニカルタームやジャーゴンを弄することを嫌う性質が、それまでは哲学や思想への接近を阻んでいたのだが、かえって本格的な学究には好都合かもしれないということであった。もしかして学者に向いているのではないかと次第に思い始めたのは博士課程に進んでからのことである。

とはいえ自分は、これらすべてを「私の選択」として生きてきたわけではなかった。何か大いなるものに突き動かされ、導かれており、選択しているというより、それ以外に自分が生きる道はなかった、というのが正直なところである。

生まれた場所が、足尾銅山鉍毒事件の被害地の隣だったということもあり、現在は田中正造の研究に少しずつコミットしているところだが、田中正造にひかれるのも、彼が同じく公共に奉仕することを人生の指針とし、目の前で困っている人をやむにやまれず、助けなければならないという惻

隠の情に突き動かされた人だったということが大きいと思う。それ以外にそう生きるしかなかったという人格の見本が、自分の故郷で活動していたという事実は、目に見えない形で自分を支えている。

東京大学も、またそういう場所なのではないかと思う。世間では悪い学者たちの巣窟のようなイメージを持たれているが、私がここで、これまで出会ってきた学者は、皆どこかに使命感のようなものを宿していると感じさせてくれる。

教師として後進のものを指導するといっても、こうした自分の生き様や学問への姿勢を押し付けてよいものかどうかは、ためられる。中には、自分の好きなことしかやらない、ということをやめて、そのポリシーに忠実に生きている研究者もいる。それも立派だと思う。

ただ最後に付け加えるとしたら、やはりエーリッヒ・フロムの言葉である。自分が自由に選択しているように思っているとき、それはその人の性格構造に規定されており、実は不自由なのだという警句である。それを自覚し、その選択が生をもたらすか死をもたらすかを基準とすると、おのずから選択は決まってゆく。自分の場合は、それがより多くの人の幸福につながるか、否かという基準になる。

私の選択は、きっとこれからも「私の選択」ではないだろう。